

嘘

渡辺温

青空文庫

雪降りて退屈で古風な晩であつた。

井深君の邸に落ち合つた友達が五六人火のそばに寄つて、噓吐き——話の話しくらべをした。自分の素晴らしい噓で人を担いだ話や、またはそのあべこべのしくじり話やらをめいめいが語つた。

そしてさて、主人の井深君の番になつた。井深君は、誰よりも一番多くその生れ付きの中に小説家的な要素をもつていたばかりではなく、日頃の生活も当り前の様式とは少からず異つていたので（——それらの点はこの話を聞くだけでも直ぐ察せられる事なのだが）誰も齊しく井深君の番になるのを待ち構えていたのだつた。

——偽瞞こそあらゆる芸術の本体だ、と誰かそんな風な事を云つた西洋人があつた。噓と云つても、それが何人にもどんな損害をも与えない場合になら勿論少しも悪かろう筈はない。昔噓をして聞かせるのと同じとも変りはないのだから。僕は御存じの通り非常な空想家だ。それだから、つい思わぬ無用な噓を吐く時がある。何故と云つて、空想を最も効果的に他人に伝えるためには、どうしても大きな噓を吐かなければならない事になるのだから。……で、これから話す話は、僕がひよつとしたはずみにくだらない噓を云つてし

まったお蔭で、意外な莫迦を見た話なんだがね。話の筋は極くたわいもないのだが、それでもよく考えてみると、何だかこうひどく妙な気がするんでね。尤も僕だから妙な気もするのかも知れない。だから君たちにはつまらないかも知れない。が、まあ話してみよう……

……お正月の松がとれてから未だ幾日も過ぎない頃であつた。夕ぐれ近い空は雪空で、低く垂れ下がったまま白つちやけて凍りついていた。井深君は銀座を散歩していたのである。北風が唸りながら舗道の紙屑やごみを浚つて吹いた。追の銀座通りではあつたが、行き交う人々はみんな身を竦めながら忙しそうにして歩いていた。井深君の如き純粋な散歩者は他には殆ど見当らなかつたと云つてもいいに違いない。井深君はそれこそもう散歩の中毒みたいになつていて、毎日々々たといどんなに空あんばいがすぐれなくても、どんなにひどい木枯が吹きまくろうとも、この日課だけは決して忽せにしなかつた。そしてその散歩に、人一倍おしやれな井深君は何時もきまつて中山帽をかぶり立派な黒服を着て出かけるのだつた。――断つておくが、井深君の年齢は、そんな身形みなりをしても、未だ三十二歳には少し間があつて、しかもその実際よりも更に三つ四つ若く、つまり弱冠はたちそこそこにし

見えないような童顔をしていた。

で、とにかく何の用事もなく、何の^{あて}的もなく、新橋の方から銀座通の左側の舗道をぶら歩いて行つた。そして尾張町の四辻より一つ手前の四辻に差しかかった時である。その角から不意に、まるでその横通りを吹き抜ける風にあおられた操^{マリ}人^オ形^{ネット}のような足取りで、若い女がオレンジ色のジャケツを着て飛び出して来たのであつた。帽子をかぶらぬお河童で赤ん坊みたいな顔をした娘であつた。ところで、それがどういうつもりか井深君の前に危くヒョイと踏み止まつたが、井深君の中山帽子の頂からスパツツをつけた靴の尖まで、ジロリと一つぺんに見上げ見下ろすと、さて身を転じて颯々と肩をゆすり乍ら歩いて行つたのである。

（まあ！　なんて女なんだろう！……）

井深君は今日が日迄幾十度となく、いや恐らく幾百度となく同じような身形で銀座を歩いた。併しついぞ一度だつて通り掛りの者なぞからそんな風にして見られたためしはなかつたのだ。だから屹度彼女は偶然井深君と見間違える程よく似た恰好の男をその知己にもつていたのであろう。……が、たといそうとしても何という厚かましい不躰な眼付きだったのだろう！　……育ちのよい少年の如く殊の外氣弱な井深君は胸を動悸させ乍ら、逆毛

立ってやわらかい草むらのように纏れ合っているお河童頭の後姿を見送った。

ところが、それから一時間も経ったかと思う頃、同じ場所でもまたもや彼女と出会ったのである。井深君はその小一時間の間、ブライヤアのパイプと一緒に鰐石の上を歩き続けながらも、喫茶店でポスタムを啜り乍らも、如何にもそのへんな娘の姿が気になってならなかった。それ程だから再びその四角へ通りかかった時には、勿論横の通りを振向いて見る位の用意はあったのだ。それで振り向いてみた。すると曲り角からつい三間ばかりのところを、その娘がスペインの踊子のように両手を腰にかつて大きく肩をゆすりながら向うへ歩いて行くのである。甚だ奇妙なことであつた。と云うのは、彼女が若しも其処の鰐石の中から突然せり上つて来て歩き出したのでもない限り、そのあたりは恰度××ビルディングの普請場の板^{いた}囲^{べい}が続いているところだったので、彼女がそうした工合に意気揚々と立ち出でそんな玄関口なぞは一つもなかったのだから。

（おや——）と井深君は屹驚してちよつとの間足を停めた。その途端にオレンジ色の娘はクルリとお河童の頭だけを廻して井深君を見た。そしてあけっぴろげな笑顔でニツコリ笑つたものである。が、直ぐまたすたくくと威勢よく肩に波を打たせながら歩き出した。

（ははあ、あいつ、不良だな——）と井深君はその時はじめて気が付いた。

氣早な冬の陽ではあつたし、それに空模様はいよいよ怪しくなつて来ていたので、もう
 四辺の色合はすっかり物悲しげに夕づいて見えた。そのトワイライトの中を風に吹かれて、
 オレンジ色の大胆らしく大股に遠ざかつて行くのを見守っている中に、井深君はどう云う
 ものか、ふと後をつけてみたい誘惑に囚えられたのである。……こんな風に云うと或は井
 深君を誤解する人があるかも知れない。併し實際は稀にみる温厚の士で、その年になつて
 未だ茶屋酒の味はおろか、飯を食べに這入るカフエだつて白粉の臭のしそうな家はひたに
 敬遠している程の井深君である。ただ、おそろしく気まぐれでその上並々ならぬ空想癖を
 もつていたために、それが偶々たまたまこうした思いがけない調子外れの行為となつて現われる
 迄の事であつた。

井深君は外套の襟を深く立て、ついていた蛇紋樹スネエキウツドのステッキを小脇にかい込むやも
 う一町も先の方へ小さく薄れて行くオレンジ色のジャケツを追いかけ始めた。井深君は人
 並より背の高い方であつたし、女の足の一町程ならば容易に取り返すことが出来た。が、
 そう早く追い付いてしまったところで、さてどうにもならない話なのである。井深君は少
 くとも五間の間隔を残して置かなければならなかった。娘はと云うのに、何も気が付かな
 いらしい様で、無論そんな莫迦な事はあるべくもないのだが、とにかく決して背後に心を

配るような素振などは見せもせずに真直に歩いて行く。そして何時の間にか、今しがたまであれ程派手で威勢のよかつたのに引きかえ、後姿ながらひどく元気を失い如何にも悲しげな恰好に首や肩をまるまるとすぼめているのであつた。

二人は間もなく山下町の河岸に出た。黒くよんだ河水は乏しい街燈が凍えて映つて暗く淋しかった。そして悪いことに到頭雪が降つて来たのである。しびれを切らしていたような勢いではげしく降つて来た。

井深君は、みるみる雪のために、帽子もかぶらないお河童の頭とオレンジ色のジャケツが白く塗れて行くのを眺めているうちに、少々変な氣持がし出した。

（はてな！ これは見損いをしたかな——）

だが、殆ど同時に娘もそれと同じことを考えたらしかった。そして俄に踵を返すと、ともに井深君の前へ立ちふさがつた。

「？……」今にも泣き出しそうな子供の大きな眼で見上げた。

「今晚は——」と井深君は辛うじて云つた。

「あたし、寒くて、それにお腹が空いて……」と娘はさもさもそんな風な声で云うのであつた。

「何処か、この付近にいい家がある？ それとももう一ぺん銀座迄戻りましょうか。」

「いいえ、この直き裏の通りにあたしの知っている家があるわ。」と娘は赤くかじかんでしまった指で指さしながら云った。

「そう、じゃ其処へ行きましょう。」

井深君は娘を連れてその家へ行つた。狭い路地を這入ったところにある見るからに不景気そうな家で、青い花電気のさしている見世窓のガラスへ弓形にローマ字でカフェ・マンガツとするしてあつた。

（マンガツ……満月と云う意味かしら）

と井深君はそんな事を思い乍ら雪をはらつて其処の二階へ上がった。お客は他に一人もなかった。それでも仕合せなことに、ガス・ストオヴが薔薇色の炎を輝し乍ら盛にたかれているのを見て井深君はホツとした。

「召上り物は？」

更紗の前かけをかけたひねこびたような女給が、二人がストオヴの傍の食卓へ着くのを待つてそう云った。

「何？——」と井深君は娘に訊いた。

「何でも——」と娘はつつましくやかに答えた。

井深君は少しく勝手が違っているように思った。娘が「あたしの知っている家」と云つた以上、そんな女給ともよく識り合つていて、食べ物は何論万事さぞ気儘に振舞つてみせるだろうと考えていたのに、全くそうではなかったのである。そしてまた女給にしろ、娘に対してどんな特別な親しきをも、或は怪しきをも示さなかった。してみると、娘が知っている云つたのは単にその家の所在を意味するだけのことらしい。二人は全くフリのお客に過ぎなかった。

そこで井深君は、自分でも未だ夕飯前だったので、兎に角あまり上等ではないその家の料理を娘につき合つて食べた。娘はいかにもおずおずと振舞いはしたものの、彼女の胃袋は井深君の二倍の食欲をもつてむさぼり食べた。井深君はその様子を決して不愉快ではない、むしろ或る愛情をもつて観察した。年恰好は十六七位の見かけなのだが、それでも本当はもつと余計なのかも知れない。マシマ口のように豊かな顔の輪廓に思い切り短く刈り上げてしまつたお河童がちつとも不自然でなくよくうつっていた。目鼻立ちもわりに品があつてそう悪くはなかった。殊に眼は、物を食べ乍ら時々見上げては極り悪そうに笑う眼は、睫毛が長く散りひろがつて、少しばかりやぶ睨みで、ひどく子供っぽい表情になつて

可愛らしかった。だがさて着ているオレンジ色のジャケットは、銀座通りでひよつと見た時には随分花やかで立派だったのに、よく見るともうすっかり古びてしまつて肩のあたりに大きな穴が三つもあいていたのであつた。（おやおや、これはひどい——）と井深君は何だか急に果無いものを見たような気がした。

やがて食事が終ると女給は張り合いの無さそうな挨拶をして階下へ降りてしまった。

「さあ、御飯がすんだら、少し火のそばで暖まろう——」

井深君はそう云い乍ら椅子をガス・ストオヴの前へ引き寄せた。

「ええ。」娘もおとなしく井深君の真似をした。

「君、外套がほしいだろう？……」と井深君は薔薇色をしたストオヴの中を見たままで云つた。

「ええ。」

「五十円もあれば買えるかな？……」

「そりやあ、買えてよ……」

井深君はそこで黙つてふところから沢山の紙幣束を呑んで大きく膨らんだ紙入を出すとその中から五枚の草色をした紙幣を引き抜いて傍のテーブルに置いた。しかし、娘はそれ

を見ると周章で井深君の手をおさえて云うのであった。

「いらないわ、いらないわ。……あたし、そんなにはどっさり、あんたからは貰おうなんて思わないわ。……五十円なんて！——五円もあれば沢山。ほんとに五円もあればいいの……そうすればこの毛糸の上衣の穴が隠れる位の襟巻が買えるから。」

そうして娘は両手をジャケツの穴のところへ当てて、巧みに目ばたきをさせながら笑って見せたのである。井深君はそれを見ると一層ひどく可哀相になった。

「私が上げたくて上げるのだから、へんな風に遠慮なんかするものではないよ。ね、取ってお置き。」

「嫌。あたし、ほんとに要らないんですもの。……まあ、あなた！ とてもいいネクタイピンをしていらつしやるわね。」

娘は両手を肩に当てた儘、その肱をテーブルの上につき乍ら井深君の胸に目をつけてふとそんなくつつ着かない事を云った。

「これかい？——」

「ええ。ダイヤモンドでしょう。あなた、なかなかおしやれね。」

「——そんな事はどうだっていいじゃないか。それよりも早くこのお金をおしまいなさい

」。

「嫌。あたし、そんなに沢山嫌よ。下さるのなら五円でいいの。」

「強情っぱりだね。けれども私だつてもつと強情っぱりだ。どうしても取らなけりや承知しないよ。——なぜと云つて、これには私としてみれば立派な理由^{わけ}があるのだからね……」
そう云つて、井深君は急に真面目な顔をした。

「理由？」

「うん。……君は今、私のタイピンの事を云つたね。このタイピンがその理由なのだ。まあ聞きたまえ。面白い話なのだから……」

「え、聞かして——」娘もちよつと面喰つた様子で、井深君の顔とそのネクタイピンをば見くらべた。

「去年の春だよ。或る日、日が暮れたばかりでね、私はやっぱり銀座通りを散歩していた……」と井深君は両手の指を膝の上でくみ合せ乍らストオヴの方へ向いたまま話しはじめた。

「何時ものように、一つぺん新橋の橋の袂迄行き尽して、また引き返そうとした時だった。私はふとあすこの博品館の横手の薄暗がりの中に、ぼんやり立って、どうやら泣いている

らしい恰度君位の背恰好の女の子の姿を見出したのだ。身形はと云うと、お河童で橙色のジャケツを着て——つまり、君の今のなりと同じようなのだね。悪く思っちゃいけないよ。大して変った風と云うわけじゃなし、同じ身形の人が一人や二人いたって、ちつとも不思議はないさ。——で、ともかく私はその女の子のそばへ行行ってきいてみた。女の子はやっぱり泣いていた。そして、姉さんと一緒に銀座迄買物に來たのだが、はぐれてしまつて、電車賃もないし、家へ帰れない——と云うのだ。……なぜ妙な顔をするのだね？　そりゃあ、無論その女の子は嘘を吐いたのさ。併し、私はその時はそれを嘘だと思わなかつた。その泣き乍ら物を云う様子は、どうしたって、私の心にそんな冷めたい疑いをさしはさめる程の余裕なぞ与えなかつたのだもの。私はすっかり同情してしまつて、その子に一円のお金を貸してやつた。するとその子は非常に喜んでね。そうしてそのお礼にと云つて、持っていた伊太利革イタリーの手提の中から一本のネクタイピンを——とり出すと、私がどんなに断つても、自分の手で私のネクタイにさしてくれると云い張つて聞かないのだ。私はそれで為方なく、（何と云う無邪氣な面白い子なのだろう……）と笑い乍ら、どうせそんな年のいかない女の子が持つているのだから、二十錢位のおもちやかも知れないそのピンをさして貰うために、腰を屈めて首を差し出した。ところが、どうだろう。女の子はピンをさ

し終えるが早い、突然いやに冷めたい手で私の両耳にぶら下がると、私の唇に接吻して、
どんどん暗やみの方へ逃げて行つてしまつたではないか。私は呆氣に取られて茫然として
いた。……ところが、それから暫くして氣が付いたのだが、私はその女の子のためにふと
ころの紙入を掏られていた。つまり、一本のネクタイピンと素早いキスの代価をうまうま
と支払わせられたわけになるのだね。……が、それはそう企んだ先方のとんだ見間違いで
ね。と云うのは、お恥しい話だが、私はその頃或る事情で甚だお金に困つていた。それで
紙入にお腹を空かせて置くのも私の性分でへんにみつともない氣がしたので、新聞紙をお
紙幣の大きさに切つてどつさり入れて置いたのだよ。本物のお金と来たら五円も入つてい
なかつたらう。……いいかね。そして、それに引きかえて、二十錢位だろうと思つたネク
タイピンは後でしらべてみると、どうして立派な物で大丈夫五十円の値打はあると云う品
物だつた。……尤もその女の子だつて、何れもともとは何処からか不当な取引で手に入れ
たのだから、それ程高価な品物とは氣が付いていなかったかも知れないのだが。……
それにしても、私はどうも氣の毒でならないのだ。私にはどうしてもあの女の子がそう大
外れた悪者とは思えないのだがね。あんな無邪氣らしい——と云つても何分暗かつたので
顔は到頭はつきり見る事が出来なかつたのだけれども。ひどく冷めたい手をしていた事だ

けは覚えている。一体手の冷めたい人間と云うものは、西洋の小説なぞにもよく書いてあることだが、たいてい内気でおとなしいものだ。屹度付近の物蔭にあの子を操っている悪い奴が隠れていたのに違いないと思う。……話と云うのはそれだけだよ。で、つまり私はその時以来、このネクタイピンに対する相応の代価を、その女の子に遇ったならば返してやろうと心がけていたのだ。だが、それはどうも無駄らしい。もう時日も大分経ってしまったし、そうかと云つて、警察に頼める性質のものではなし、それに第一肝心なその子の人相が私自身にすらはつきりと見とめられてはいなかったのだから。……そうしてみれば、その子に、たとい身なりだけなりと似通っている君に、——そしてまた、変な事を云うようだが、その子だつてどうせ銀座辺にそうしていたのだから、やっぱり君たちの知合かも知れない——その君に、この五十円を上げるのは満更無意味でもなからう。……どうだい？ね、わかつたろう。だから、遠慮しないでこれを全部持つて行く方がいいよ。」

井深君は、そう語り終えて娘の方を見た。

すると、おどろいたことに、娘は両手を顔におし当てて、シクシクと泣いているではないか。そして泣きじやくりながら云うのである。

「——あたし、……あたし……なんて悪い子なんでしょう。……すみません、すみません。」

あなたみたいな良い方にそんな事をするなんて……」

井深君はびつくりした。

「おや、君は何を云い出すのだ？ 何を泣くんだ？……」

「あたし……あたしがその悪い子だったのよ。」

「え、君が」

井深君はハタと当惑した。なぜと云つて、井深君の今話して聞かせたのは、便宜上、そして無論揶揄半分の気持も手伝つて喋つた全然根も葉もない井深君一流の作り噺だったのだから。タイピンは、つい一月程前に新しく買ったものである。

（どこまでも途方もない小娘なのだろう……）

逌の井深君も呆れ返ってしまった。が、なんぼなんでも今更自分でそれをぶち壊すわけにも行かない。井深君はまるで魔法にでもかかったような頼りない気持で娘の肩に手をかけて云つたのである。

「——もういい。もういい。泣くのはお止し。私は最早や何とも思つてやしないのだから。……いや、それどころか、今も云つた通り私はむしろ氣の毒にさえ感じていたのだ。」

「すみません。すみません。……あんた本当にいい方ね。あの時だつてそう思つただけ

れど。……だけど、あの時のあたしの顔を思い出せないなんてないわ。ねえ、あたしだったでしょう？……あたしの顔、よく見て。ねえ、もつとそばでよく見てちょうだい。……」娘はそう云い乍ら目や鼻や顔が涙ですっかり濡れ輝いている頬を井深君の顔のすぐ前まで持つて来た。そして井深君の両手をつかんで、

「それから、あたしの手？　ね、ほら、冷めたいでしょう。まるで氷のようだわ……でも、今は冬だから当にならないこと？……」

「うん、……ほんとに、君だったかも知れない。いや、全く君だったようだ。」と井深君はほとほと弱って云った。「しかし、そう判ったらなおのこと結構だ。このお金は当然君の物と云えるわけだ。だから早く蔵いなさい。私はもう帰らなければならないのだよ。」

「嫌だわ、あたし、嫌だわ。あたしはもう五円のお金だって欲しくないの一銭もいらなの……」

「これ程事の道理がはつきりわかつててもかい？　何という聞きわけのない子だろう！」

「どうしても嫌だわ。なんでもかんでも貰わなければいけないのなら、いつそそのネクタイピンを貰うわ。」

「莫迦な、こんなピン十円にもなりやしない……」

「あら！ でも、あんた、今五十円位するってそう云ったでしょう。」

「うん、それは、併し、買値の話だよ。売るとなるとなかなかそうはいかない。」

「あたし売りやしなくてよ。だから、それをちょうだい。」

「わからずやの子だね——」

井深君はそれでも為方がないので、タイピンをば取って娘に渡した。

「まあ、素敵！……ちよいと、あたしにだって似合うでしょう。」

娘は心から喜ばしように、そのピンを橙色の胸にさして、ちよっとポーズをしてみせながら明るい蓮葉な声で笑った。

「さあ、ほんとにそれでいいかね。……それでは、それでいいものとして、私はもう帰るよ。」

「待つて。あたしも帰るわ。」

それから二人はその家をカフェ・マンゲツを出た。おもてには雪がさかんに降りしきっていて地べたはもう隙なく塗りつぶされてしまった。二人とも傘がなかったので、再び雪に塗れ乍ら電車道まで歩いた。娘のお河童頭とオレンジ色のジャケツとは忽ち真白になった。

（あんなタイピンなんか貰うよりも、なぜ外套でも買うことをしないのだろう！ 考えれば考える程へんな娘だ——）

井深君は娘のその痛々しい有様を何とも云えない心持で眺めたのであった。

電車道に出ると、ふと娘は立ち止まった。そして、ひどく愁しそうな顔をして井深君を見上げて云ったのである。

「あたし、やつぱりお返しするわ、このピン……」

「うん、それがいい。それがいい。そして、やはりお金を持っておいで——」

井深君は、ほつとした気持で、直ぐ外套と上衣の釦を外してふところに手を差し入れた。すると娘はあわただしくそれを押え止めて、

「嫌よ、嫌よ。お金なんか！……あたし、つまんないわ。」と殆ど泣きそうな声でそう云うのである。

「だって、それでは可笑しいじゃないか——」

「いいの。その代り、お願いがあるのよ。このピンを、もう一つペン私の手であなたにさせて下さらないこと？……おいや？」

「ちつとも嫌なことはないが、しかし……」

「有難う！」

娘はちよつと背延びをし乍ら、井深君の首に片腕を巻きつけて、そしてそのタイプピンをさした。それからそれが済むと、両手で井深君の耳をひっぱって、井深君に雪だらけの目と鼻と口とで接吻するが早いか、「サヨナラ！」と叫んで、威勢よく雪の中を駆け出して消えてしまったのである……

* * *

「……僕は、それで呆然としてしばらく其場に佇んでいた。……」と井深君は鳥渡言葉を切つて、軽い溜息を一つ吐いた。

「なんだ。それでお終いかい？ いやはや！ 僕たちは何も君のローマンスを聞く筈ではなかったのだが——」と聴き手の一人が苦情を申し立てた。

「それでお終いにしてもいい。——それだと、それつきりだと誠に可憐でいいではないか。……が、残念なことに未だ少しあとがある。……それは、なぜ僕がその場に雪だるまのようになり乍ら呆然と立ち尽してしまったかと云うことだ。君たちに解るかね？」

「なぜだ？」

「つまり、僕は自分の愚しい思い付きの嘘から、そのオレンジ色の娘に如何にして僕のふところの紙入を盗み取るかを教えてしまったからさ——」

「なる程！小娘のために見事にしてやられたのだね。……が、ところで、どっこい、その紙入の中はまた古新聞の束ばかりだったと云うのだろう！こいつあ傑作だね。は、は、は、は……」と始終探偵小説ばかりを愛読している友がしたり顔に云って笑った。

「いやいや、早合点をしてくれば困る。それ程あくどい洒落ではない。——それに、そんな酷い細工をするには、相手はあまりに可愛らしい好い子だった。ざっと二千元。紙入の紙幣は全部本物だったよ……」井深君はそう云って口を噤んだ。

「すっかり本物だつて？ 二千元！……」不思議な不安の影が居合せた人々の顔に行き渡った。

井深君は、そこでこうつけ加えた。

「諸君、そんなに妙な顔をするものではない。紙幣は正しく全部本物だったが、安心したまえ。——この話全体は僕が考え出した嘘なのだから。」

青空文庫情報

底本：「アンドロギノスの裔」 薔薇十字社

1970（昭和45）年9月1日初版発行

初出：「新青年」1927年3月

入力：森下祐行

校正：もりみつじゅんじ

1999年9月14日公開

2007年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嘘

渡辺 温

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>